Ⅱ分野 第6分科会

多文化共生と人権

司会者 辻本 久夫 桂 崇子

記録者 福垣 敦夫 福本 千歳

報告者Ⅰ 津村 恒平 (東播磨)

子どもたちの生きる国際社会、みんな笑顔の町に暮らすための多文化共生教育

報告者Ⅱ 藤友 和子 (神戸)

呼び・名乗る教育

～在日コリアン4世の生徒と共に～

研究討議の概要

<報告Ⅰについて>

司会 報告Ⅰでは、世界の様々な国の人々との交流の在り方についての報告を受けた。参加いただいている皆さんの質疑やご意見を聞かせていただきたい。

神戸 この授業は小学校6年生を対象としたとあったが、その学年を選んだ理由はなにか。

報告者 本校は2年前から外国語活動に力を入れてきた。そのことと、私が6年生の担任であったので、取組みやすかったためである。

阪神 絵本の教材として「大根の国、ニンジンの国」を活用されたそうだが、その絵本はどのような内容の教材であるか。

報告者 ニンジンの国は赤が常識であるが、大根の国では白が常識である。国が違えば常識が異なることを学ぶという教材であった。

神戸 私もかつて県立高校で同和教育に取り組んだ。その中で、在日韓国人や部落差別の厳しさや辛さを知るには、実際に生徒の家に行かないと理解できないと思う。報告者は外国籍及び外国にルーツを持つ児童の家庭訪問をしていたのか。

報告者 明石高専のフィリピン人留学生が学校に来て交流をした。現任校では外国籍の児童は在籍しているが、詳細を把握しておらず、家庭訪問もしていない。

神戸 イスラム教の食文化について発表があったが、児童たちはラマダン明けの会等を知らないのでは。報告者の地域の学校では小・中・高で交流があり、情報を共有しているのか教えてほしい。

報告者 そういう交流の機会は少ない。

丹有 違いに気がつくための授業は、何時間で取り組んだものか。

報告者 この授業は道徳の授業で取り組んだ。じっくりと児童の気持ちも引き出しながら、余裕をもって取り組みたかったが、実際は駆け足で取り組み、1時間でやり終えた。

神戸 ふれあい集会で取り組んだ絵本教材「大根の国 ニンジンの国」にはおちがあるのか。

報告者 違う文化を持つものが違いに気づき、お互いが理解しあうというハッピーな結末で終わっている。この教材は県教委の副読本「ほほえみ」を活用した。

西播磨 違いに気がつくための授業について質問したい。本当に韓国では縦膝で食事をいただくのか。また、韓国には卓袱台があるのか。

報告者 隣国の韓国をよく知る同僚の先生から聞いた話で本当である。

西播磨 私のところに、ベトナムの生徒がいるが、多文化共生という違いを認め合うことを望んでいるのではなく、むしろ日本文化に同化したいと考えている子もいる。文化や歴史の違いをアピールするか同化したいタイプなのかいろいろあるのではないか。

報告者 そのとおりである。人によっていろいろな気持ちがあると思う。

司会者 今後、多文化共生教育に必要なことはどういうことと思うか。

報告者 違いを違いとして受けとる児童を育てていくことだと思う。現場としては、県・市から学校に配置いただいている多文化共生サポーターの先生と担任が事前と事後に打ち合わせと振り返りを持つことが大切だと思う。その時間の確保も大きな課題である。

<報告Ⅱについて>

司会 報告Ⅱは県立高校の生徒の本名宣言にいたる経過の発表でした。この発表について質疑等ありますか。

神戸 在日コリアンについては、日本が戦前にコリアンに対して行った歴史と深い関わりがある。日本史等の歴史としては学んでいるが、人権教材として取り上げられてはいないのが現状であろう。報告者は、朝鮮奨学会やウリ文化祭について知っておられるか。

報告者 朝鮮奨学会については、本校の先生から聞いたことがある。ウリ文化祭についてはどういうものか知らなかった。

司会者 朝鮮奨学会は在日コリアン保護者が自分たちの力で自発的に作った奨学金制度の団体。ウリ文化祭は奨学生が毎年12月に民族舞踊や合唱等を披露する文化祭。

東播磨 私の高校には在日コリアンは1名もいないように思う。発表のあったMさんは、在日何世なのか。また、別に帰化している生徒は長田高校には、いるのか。

報告者 在日何世かはわからない。ただ、Mさんのお兄さんも本名宣言した経緯がある。

丹有 Mさんは高校のダンス部に所属していたそうだが、ダンス部生徒たちの間ではすでに本名宣言していたのか。

報告者 はっきりとは本名宣言はしていないが、友達は薄々気づいていたと思う。彼女の名前の漢字を韓国読みしていたことがあったので。

丹有 報告者の学校では、彼女に続いて本名宣言をした生徒はいたのか。

報告者 いなかった。

司会者 Mさんは中学校時代、本名について、どう考えていたのだろうか。

報告者 中学校時代から、大学生になったら本名宣言すると言っていたようだ。

司会者 神戸市にはオリニマダンという韓国の伝統芸術を学び、発表する場がある。こういった活動が在日コリアンの子どもに本名や母国のことを考えるきっかけを与えていると思う。

阪神 私もそう思う。オリニマダンという場が子どもたちの心の拠り所になっている。しかし、今は在日コリアンよりもむしろ日本人が多くなっているのが現状である。

西播磨 私の学校には韓国籍の生徒がいるが、一番上の姉は韓国籍とわかったが、三番目の妹は日本人と見分けがつかない。たまたまを見るだけでは、わからないことも多いのではないかな。

司会 現在では、韓国人と日本人が結婚した場合、子どもの国籍は自由選択なので国籍だけではルーツを判断できない。一方、名前のことでひどいことが兵庫県内で起った。私立幼稚園教員として採用内定をもらったが本名を隠してしたという理由で、内定取り消しになった事件である。彼女は内定取り消しで大変苦しんだ。学校で名前のことを学ばなかったと言う。私たちは、この現実から目を反らせないようする必要がある。

阪神 私は外国労働者の居場所支援をするNPOに所属しているが、日本語がしゃべれても、読むのがしんどいことを実感している。支援する際に困難なことに遭遇する。特に進学や就職に、たくさん書類が必要である。学校や教育行政は外国人が増加する多文化共生社会で、その対応に苦慮している。

阪神 私は父がイラン人、母が日本人である。そのことによって小学校時代にいじめられたということはなかったが、人間関係で少しうっとうしいという思いを体験した。中学校からは、芦屋国際中等学校に進学した。この学校は外国籍の生徒が多い。PTA活動でも保護者は自分の国自慢の料理を披露する活動もある。20歳になり、イランか日本か国籍の選択を迫られた。結局は日本籍にしたが、父の祖国に対して、何か割り切れない気持ちが残ったことも事実である。

司会者 外国から帰国・来日する人が増加し、多文化共生社会が進行する中で、その子どもへの学習支援、進路支援は全国的に大きな課題である。兵庫県は外国人生徒公立高校特別入試を導入したが、進学率がまだまだ低い。

2 総括と今後の課題

この分科会では、東播磨の工業地域にある小学校と神戸市長田区にある高等学校での多文化共生と人権に関する2つの実践発表をいただいた。また、教室いっぱいに参加したみなさんからも活発な意見が飛び交った。以下、総括と今後の課題を述べさせていただく。

多文化共生社会の進展する社会の中で、日本に住む外国籍及び外国にルーツを持つ児童・生徒やその保護者と日本人との共生の在り方について、議論を深めることができた。

そういった中で、総括と今後の課題についてまとめてみたい。多文化共生社会の進展を阻む2つの壁を指摘し、まとめとしたい。

(1) 言葉の壁

外国から日本に來られて、日本語を上手にしゃべれるようになっても、日本文を読み書きしたり、理解することはかなり難しいのが現実である。そのため、子どもが学校からプリント等を持ち帰っても、漢字等が読めなければ内容を理解することは不可能である。そのために、児童・生徒たちは不利益を被ることがある。学校の教員や地域の支援者等の児童・生徒を支援に携わる人は、この点をよく理解してほしい。

(2) 外国の文化や歴史に対する壁

日本が明治以降、朝鮮半島で行った「創氏改名」や日本語の押し付け等々の植民地支配の歴史的な事実を理解したうえで、在日コリアンの人に対処することが大切だと考える。通称名使用や排除としての国籍条項などは現在も残っている。

また、その他の外国籍あるいは外国にルーツを持つ人たちと共生する社会を作るためには、お互いの違いを認め合うことだと考える。

そのためには、間違った狭い見の偏見や独りよがりの考えを捨て、相手の人を理解しようとする心と、不十分な制度等を補完しながら改善しようという姿勢が必要で

ある。共生と共存の気持ちをもって出会い、交流していくことが大切であることを再度強調して、この分科会の締めくくりとする。